



「ISS宇宙飛行士の‘moon’ score」の概要について

◆提案代表者

京都市立芸術大学美術学部 教授 野村 仁(のむら ひとし)

◆実施概要

<きぼうでの実施>

きぼうの窓から見える「月」の写真をデジタルカメラで撮影する。
写真データはダウンロードで入手する。(入手時期はおよそ1週間後)
きぼうでの月撮影は、今後約1年間かけて6回程度予定している。

<地上活動>

きぼうでの実施とほぼ同時期に、地上から月を撮影する。
宇宙で撮影した月の写真と地上から撮影した月の写真による音楽を制作する予定。

◆野村先生のメッセージ

地球は、月という衛星を持っています。夜空を見上げ、そこに輝く月を見つけたとき安らぎを感じる人も多いでしょう。

地球から約400kmはなれた国際宇宙ステーションからは、条件が整うと青い大気と共に月を見ることができます。

宇宙飛行士は、月を見ることで、故郷である地球のそばにいることを実感しているのではないのでしょうか。

これから、人類は月や火星でも活動しようと計画しています。火星に到着した時、そこに慣れ親しんだ月ではなく、2つの衛星を見るのでしょうか。そのとき私たちは、古代より親しんできた月の存在の大きさに驚くかもしれません。そんな月をテーマとします。



野村 仁教授



ISSで以前撮影された月の写真